古墳壁画の狩猟図について

若　松　良　一

はじめに

日本の古墳時代絵画の中で、北部九州と東北地方南部太平洋岸を中心とする古墳・横穴墓の彩色壁画は重要な位置を占めている。とくに人物を含む具象画はその主題を読み解くことによって他の遺物では得がたい情報を得ることができる。筆者は形象埴輪の研究を介して古墳時代の葬送儀礼を研究しているが、かねがね、壁画古墳の解析もその一環として行いたいと考えていた。とりわけ、埴輪と壁画の双方に見られる狩猟表現は葬送儀礼の本質を解明する上で必須の研究課題と位置づけているので、本稿では、壁画古墳における狩猟場面を取り上げ、その描出意図を探ろうとするものである(1)。

Ⅰ　古墳壁画の狩猟図

1　福岡県五郎山古墳の狩猟図（図１・２）

福岡県筑紫野市原田に所在する直径32mの円墳(2)で、複室構造の横穴式石室を持ち、玄室の奥壁と左右側壁、玄門の両袖石に黒・赤・緑の顔料を用いた彩色壁画が描かれている。人物を含む群像は奥壁の下段大型の腰石とその上部の五角形をなす石材にある。画像が多く、配置法も複雑であるが、次のように仕分けることが可能と思われる。

① 下段右側に配置された２個の鞆・靫・弓及び中央部の鞆は墓室を守護する意図で描かれた武器の図文であり、人物像とは無関係に先行して描かれたものであろう。

② 下段中央部の最下部に描かれた船は玄室の左右に描かれた合計３艘の船と共に巡行する船の動きを表していると捉えることが可能であり、珠文が星を表現したものとすれば、夜間の航海を示すものであろう。

③ 中央部の鞆の左側に配置された２つの騎馬像と２匹の四足獣は一体をなしている。四足獣は馬とする意見があるが、裸馬よりも大型の鹿と見たほうがよいであろう(3)。鬣の表現がないことと２人の騎馬人物の姿態が後述する射手と共通することによる。左側の騎馬人物は盾を持つとも旗を持つともいわれているが、いずれも不自然であり、弓とするのが適当であろう。残存状態不良のため復原が不正確となったものかもしれない。したがって、騎馬による狩猟図となる可能性がある。狩猟表現Ａと仮称する。

④ 下段左端の家とその右側に配置された男女は一体をなしていると見られる。男子は家に向かって両足を開いて立ち、両手を斜め上に掲げている。女子は側面図であり、何かを捧げるような姿態で天を仰いでおり、跪いているように見える。家の中心部に描かれた８字形の赤色彩色は報告では人物または霊魂の可能性が指摘されている。傾聴すべき意見である。

⑤ 女子側面図の上部には矢を番える男子と狙われている猪と思われる獣が描かれている。右手を前方に延ばして弓を持ち、左腕を開き、腕を曲げ上げるようにして矢を番えている。左利きの射手となる。ただし矢が弓の奥に廻っていたり、弦が撓んでいなかったり矛盾点が見られる。狩猟場面Ｂと仮称する。

⑥　中央の鞆の右側には犬とそれに追いつめられ背中に矢か鎗の刺さる獣が描かれる。犬の下方には左手に何かを下げ、両手を開く女子像があり、狩猟を見守っている様子である。筆者は背面図と見ている。獣を仕留めたのは下方に描かれた男子と推定されるが、保存状態が悪く、猟具の表現がはっきりしない。狩猟表現Cと仮称する。

⑦　右から2番目の鞆の左側に接して描かれた三山冠をかぶる男子は腰に左手を当て、右手を斜めに掲げているので、一見、四股踏みと見えるが、爪先が左側に向かっているので右半身（はんみ）になっていることがわかる。左側の同心円文と関係性を持ち、それを手招きする姿となろう。

⑧　上段の五角形の石には一際大きく描かれた騎馬像があり、弓を引き絞った前方には小さな獣が描かれている。体部の形状から左向きであろう。馬の尻には湾曲する竿が付き、その先端に緑色に彩色した四角い大きな旗が表現されている。馬の前方に置かれた人物は狩を見守る人物であろうか。3色を用いて描かれた唯一の人物画であり、他と区別される人物を描いたのかもしれない。胸に丸い赤彩があり魂を表現したとする意見がある[4]。狩猟表現Dと仮称する。

⑨　場面⑧上部には右半身となって左手を腰にあてがい右手を斜め上に掲げる人物が描かれている。⑦の人物と同一姿態であり、その前方に同心円文を配する点も一致している。

なお、⑨の右側の離れた位置に同心円文より一回り大きい一つの円文が描かれている。太陽を表した可能性がある。

2　福島県泉崎4号横穴墓の狩猟図（図3）

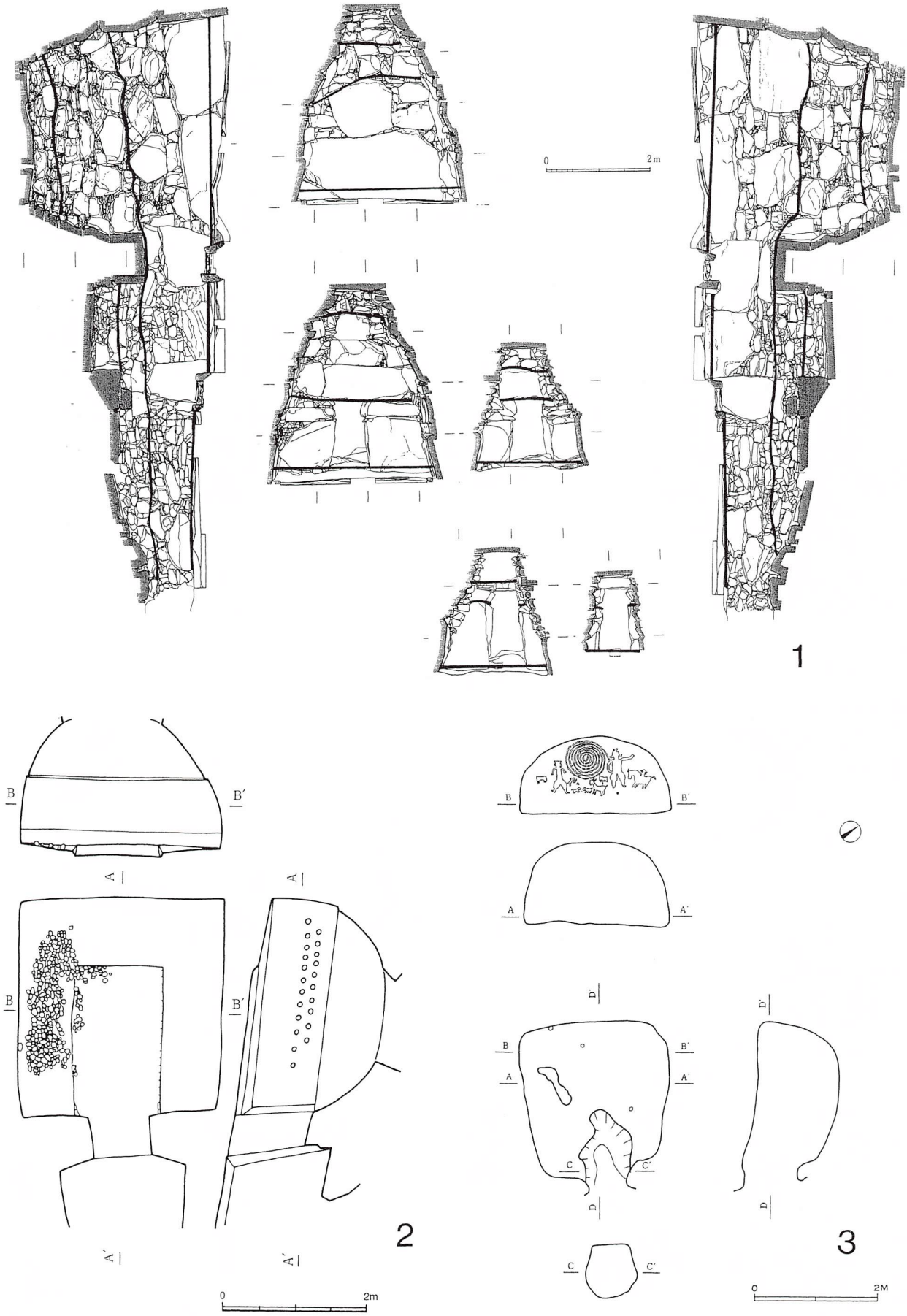
福島県西白河郡泉崎村字白石山に所在する単室構造の横穴墓で、奥壁、左壁、右壁、天井の4面に赤色ベタ塗りの彩色壁画が施されている。築造年代は7世紀初頭と考えられている。狩猟表現は奥壁にある。単列で水平方向に展開しており、向かって左から、①両手で何かを捧げ持つような姿態をとり、裳を付けた3人の同形の女性側面像[5]。②1本の水平線上に足を踏ん張り、手を繋いで立つ同形の4人の男子正面図。③左手に馬に乗って矢を番える男子の右向き側面像と右手に角の表現された牡鹿の右向き側面像。④大きな逆三角文1個。となる。また、これらの下部には珠文が多数描かれるが、中心から少し左側には細い水平線がある。

これらの図像は④を除けば、具象的であり、③が鹿を背後から騎射する狩猟図と見ることにはほとんど異論を差し挟む余地はないであろう。しかし、②については研究者の見解が分かれている。ひとつは4人を勢子と見る説であり、もうひとつは舞踏図と見る説である。福島雅儀氏は狩猟の補助的な立場にある勢子が画面の中央部に来るのはふさわしくなく、①の女性群像が飲食物を捧げ持っていると見れば、②は踊る群像であり、互いに関連して宴会と舞踏が描かれているとする[6]。①と②を関連させ、③を別の画題と見る立場となろう。また、福島氏は②を祖霊像とする大林太良説を飛躍があるとして退けている。

筆者は①から③全体を関連させて見る立場を取る。まず、②と③は一体の場面であり、勢子が手を繋いで鹿を追い込み、逃げようとする鹿を背後から騎射する場面と見る。ここで問題となるのは①の解釈である。五郎山古墳の奥壁場面④の女性像と共通性の高いこの構図はやはり重要なものを捧げ持つ姿であり、それは鹿の肉であろうと推量する。その場合、異時同画手法となるが、狩猟の結果、獲物の肉が捧げものとなる因果関係は古代人には自明のことだったのではなかろうか。

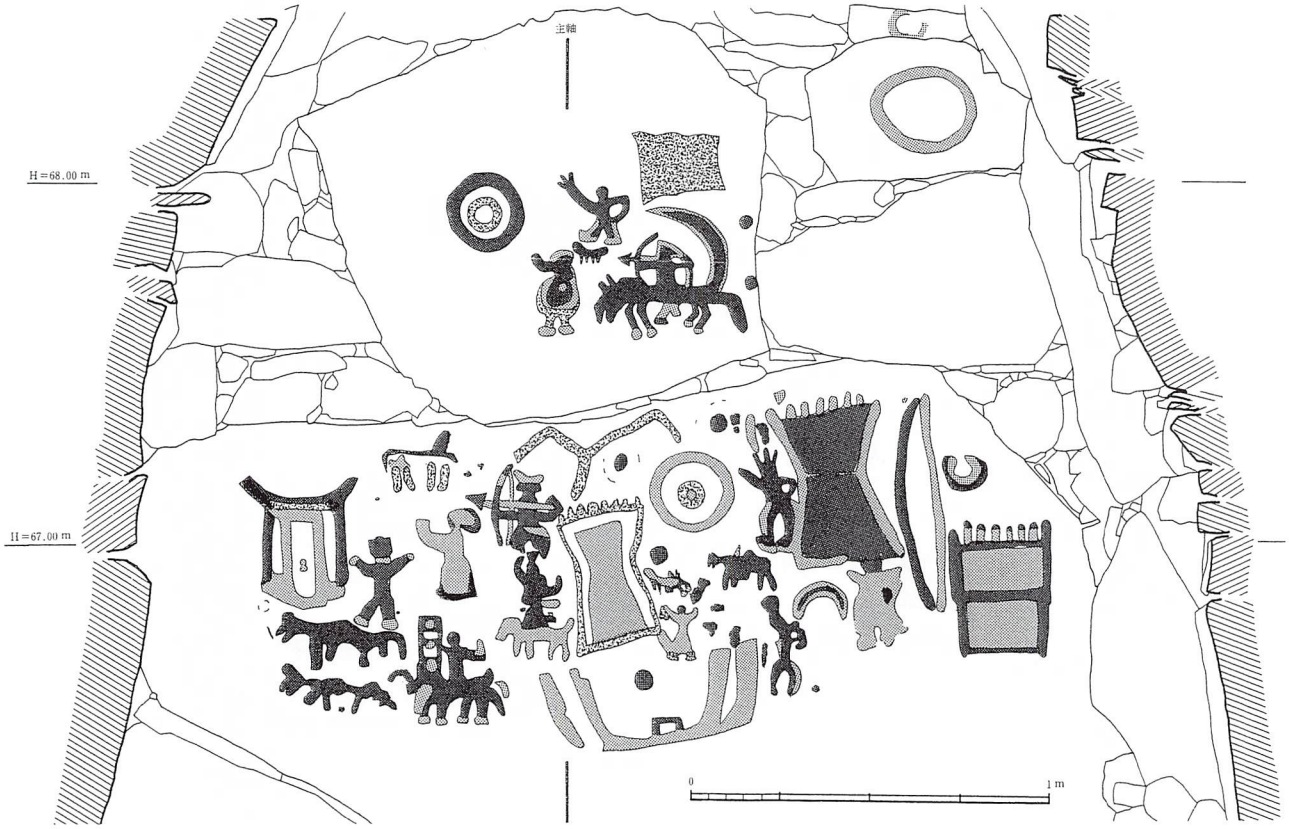
3　福島県羽山1号横穴墓の狩猟図（図1・4）

福島県原町市中太田字羽山に所在する単室構造の横穴墓で、玄室の特徴と出土遺物から7世紀中葉でも古く位置づけられている。彩色壁画は奥壁に赤色ベタ塗りの具象画、左壁、右壁、天井の3面には家の梁軒線と点文が赤と白で描かれている。狩猟表現は奥壁にあって水平方向に展開してい

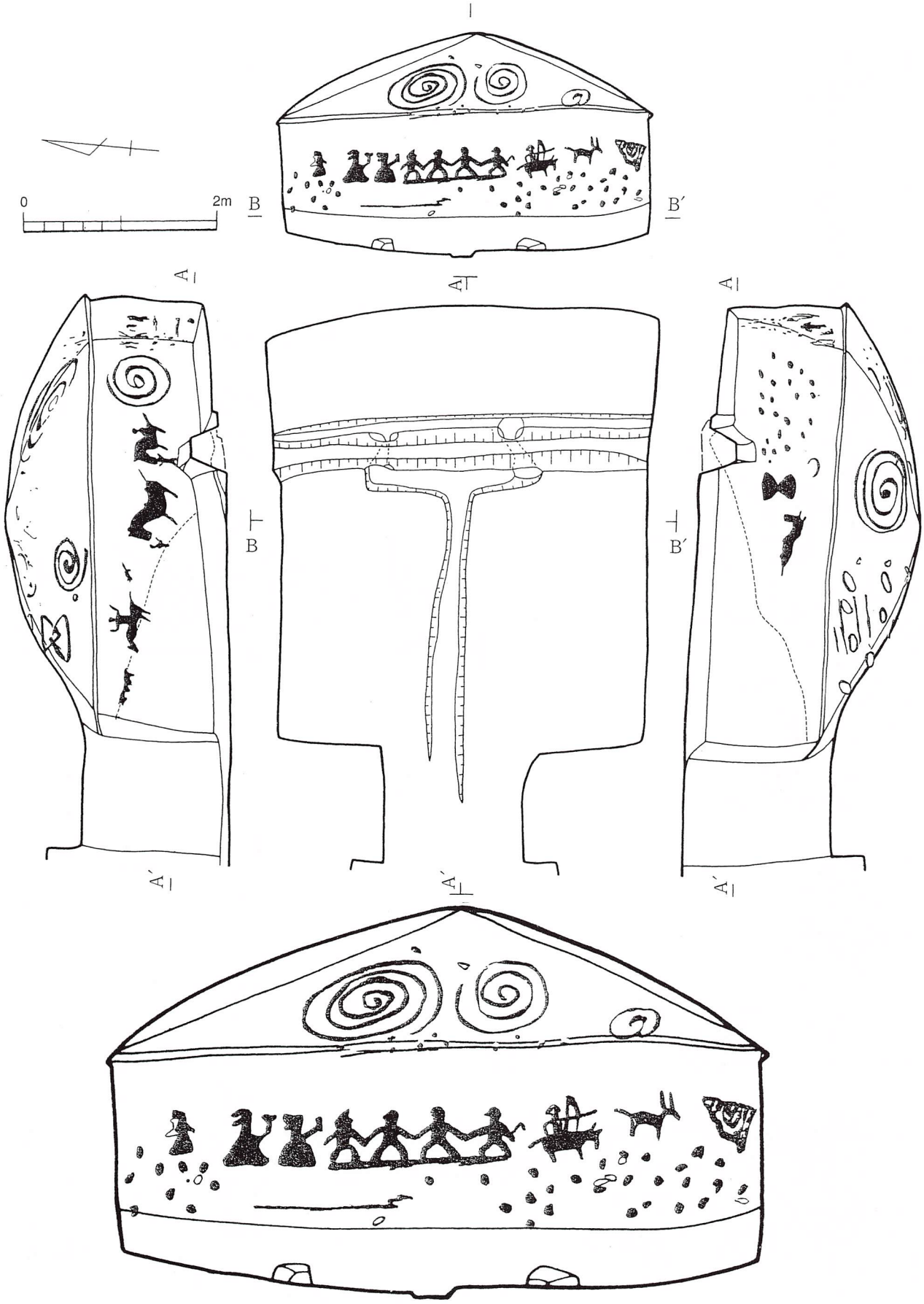


第１図　五郎山古墳・羽山１号横穴墓・清戸迫76号横穴墓測量図

1　五郎山古墳（太い水平線は築造工程ごとの仕上げ面を示す）　2　羽山１号横穴墓　3　清戸迫76号横穴墓



第２図　福岡県五郎山古墳壁画と分割される場面

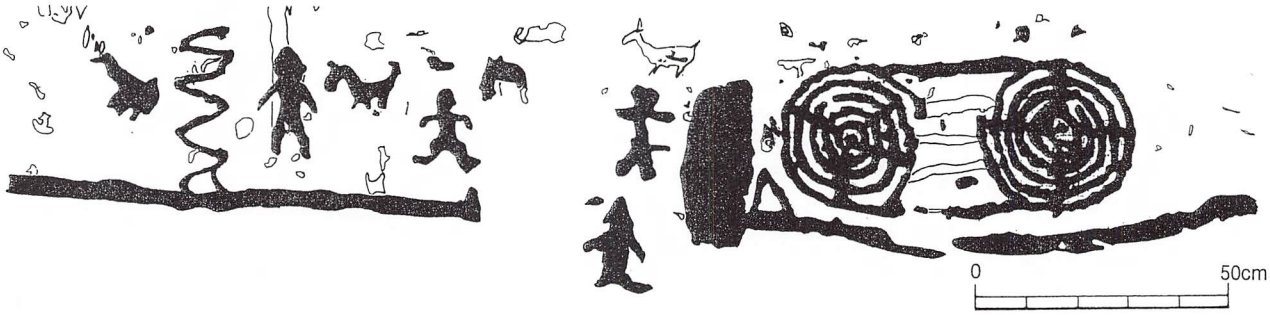


第3図　福島県泉崎4号横穴墓壁画

る。向かって左から、①動物の左向き側面像と垂直方向のジグザグ線。②人物と動物を交互に2組配した群像。③垂直軸上に上から白鹿の左向き側面図・両手を広げて立つ人物・両手を斜めに下げる人物。④塗りつぶし表現の長方形とその右側に配置された2つの渦文。が描かれている。これらの下端には水平線が引かれ、中央部でとぎれる。③の下段人物像はこの切れ目の外に位置している。

これらのうち、③の上段の鹿のみ白色の顔料で描かれ、赤色の斑点が加えられるという丹念な描法であり、抜きんでている[7]。下方に描かれた2人の人物は白鹿に向かっているので、これを捕獲しようとする場面と見てよいであろう。弓矢が描かれていないので勢子となる可能性が強い。左側に隣接する②の中で左側の動物は白鹿との類似性から鹿と見るのが妥当であろう。右側の動物は体部が消えているが、頭部の形状から馬となろう。このことからすれば、②は③と切り離す必要はなく、一体的に狩猟場面を描いたものと見ることができる。①のジグザグ線は巻狩りの際に、獲物を追い込むための柵を表現したものであろう。また、同様に、下端の水平線も柵か塀を表現したものであって、その切れ目は入口、長方形は門扉を象ったもの見れば、全体構成の把握が可能となろう。この場合、猟場は占野あるいは禁園に類する共同体の施設であったと考える必要があろう。

なお、赤と白の珠文が渦文の周囲に配されている。さらに附言すると、④の渦文は雲文の変形、したものと考えているので、車や鞆などの具象画とする意見には深入りしないことにする。



第4図　福島県羽山1号横穴墓壁画

4　福島県清戸迫76号横穴墓の狩猟図（図5）

福島県双葉郡双葉町字新山に所在する単室構造の横穴墓で、玄室の特徴から7世紀中頃でも後半に位置づけられている。彩色壁画は奥壁に赤色ベタ塗りの具象画が描かれている。配列は先に見た泉崎4号墳や羽山1号墳と異なり、水平軸上にはなく、構図と対象の大小によって三つの場面に分けることが可能かと思われる。

① 中央部にあるのは狩猟図で、2頭の獲物を追いつめて吠え掛かる犬と、その背後から矢を放つ。射手が描かれている。右手の動物は枝角のある牡鹿であるが、左手のものは小さく描かれる。頭部の右側にかすかに残る2本の短線を角と見れば、小鹿ともとれるが[8]、足の短い点、頸部と体軀の形状から猪とみたほうがよかろう。射手の放った矢はこれに向かっている。鹿の上部にも獣らしきものが描かれているが、残存状態が悪い。犬となる可能性があるように思う。

② 場面①の左側には正面を向き、両足を踏ん張って直立する男性が描かれている。頭部には美豆良と投げ捨て頭巾状の被り物が描かれている。両手を反らせて見得を切るような仕草をとる。人物の左側には四足獣が描かれるが、残存が悪く、その種類を明らかにすることは困難である。人物は高さ50cmほどで、①の射手の約15cmに比して著しく大きく、正面向きである。

③ ①の右側には正面を向いて立つ男性像が大きく描かれている。高さは約70cmあり、②の男性像より一回り大きい。ズボンを着け、足脚を結び、履をはく服装は①の男子像と共通している。頭部には頂部と耳の左右に突起する表現があり、従来、眉庇付冑とする意見[9]が強いが、筆者

は二つの理由で、異論がある。一つ目は日下氏も触れているように、眉庇付冑は5世紀に用いられたものであって、7世紀の壁画に描かれていることに問題のあること。二つ目は①の男性像と比較した場合、やはり左右の突起は美豆良とすべきで、頭頂部の突起も頭巾とすべきではないかということである。おそらく頭巾が一回り小さく描かれたために、眉庇付冑のように見えたということに過ぎないのではなかろうか。

人物は右手を腰にあてがい、左手を延ばして右側の騎馬の人物に向かって呼びかけるような仕草をとる。馬は左向きの側面図であり、人物に比例せず小さく描かれ、菅笠状の被り物を着け、両手を開いた人物小像を伴っている。人物像と騎馬像との間には対応関係を見てとることができる(10)が、図像の大きさを変えることによって、左側の人物像が主体であり、右側の騎馬像は客体であることが示されている。ここで問題となるのは人物の履の爪先方向が正面を向いていることである。なぜ右向きの側面図としなかったのか。それは、側面図では左手を挙げ右手を腰に当てた腕の表現が影絵的な絵画の場合、胴部と重なり表現しきれなくなるためであったと推量される。五郎山古墳の画工のように履の爪先方向で半身の姿勢を示す描法を清戸迫76号横穴墓の壁画を描いた画工はおそらく、知らなかったのであろう。この人物像の右肩に繋がって大きな渦文が描かれており、画面の中央部に位置している。

第5図　福島県清戸迫76号横穴墓壁画

II　壁画狩猟図の構成と表現方法

検討を行った4つの古墳及び横穴墓における狩猟表現がどのような構成をとり、表現手法がいかなるものであったか、類型を抽出して具体的かつ簡潔にまとめておきたい。

1　単位狩猟場面の類型

A　徒歩の射手を描くもの

1　徒歩の射手が正面から猪を弓で狙う構図（五郎山B）

2　徒歩の射手が犬に追いつめられた獣を弓または鎗で狙う構図（五郎山古墳C・清戸迫76号横穴墓）

※五郎山古墳Cでは狩を見守る人物を伴う。

B　騎馬の射手を描くもの

1　騎馬人物が背後から鹿を弓で狙う構図（五郎山古墳A・泉崎4号横穴墓）

※五郎山古墳では騎馬人物と獲物が複数である。また、泉崎4号横穴墓では4人の勢子を伴う。

2　騎馬人物が背面から獣を狙い、狩を見守る人物を伴う構図（五郎山古墳D）

C　射手の存在が明瞭でなく、複数の勢子を描くもの（羽山1号墳）

※場面中央に馬が描かれているが、保存状態が悪い。騎馬の射手が本来は描かれていた可能性がある。

2　狩猟図の構成ー見守る人物の存在ー

類型化の検討を通して、単位狩猟場面にはA（徒歩の射手）とB（騎馬の射手）とがあり、徒歩では正面から猪を射る場合が2例あったのに対して、騎馬では背後から獲物を射る場合が3例あり通則と見られた。そして後者の内2例の獲物は鹿であった。このことは猪突猛進型の猪と敵の気配に敏感で俊足な鹿では猟法が異なっていることをきちんと描き分けていることを示している。また、狩猟の補助者として犬を用いる場合と複数の勢子を用いる場合とが描かれているが、後者は多人数による協同狩猟であったことを明瞭に示している。とくに羽山1号墳では柵と門が表現されることから、禁園か共同体の狩場が描かれたものと考えることが可能である。

いっぽう、狩の参加者以外に、狩の様子を見守る人物が描かれていることが留意された。五郎山古墳Cに登場するのは裳を着けた女性で、左手に何かを下げている。筆者は場面④において家に向かっている女子像と着衣表現が一致することから、同一女性を描いた可能性が高いと考えている。

五郎山古墳Dの場合、馬の前方に群像中唯一の3色で描かれた異形[11]の人物が立っている。頭頂部の赤彩を頭髪、頭部左側の突出部を腕の表現とすれば、右側の馬に向かって左半身になって右手を挙げた姿勢と理解される。獲物との位置関係から勢子とすることは困難であり、心臓部に赤丸を表現することから、被葬者の霊魂を象徴していると推測する。これと対比できるのが清戸迫76号墳②の男子像である。左脇に獣が描かれることによって狩の場に立つことが示されている。遠近法のない画面構成において他より著しく大きく描かれた人物像は、実在の人物ではないことを示しており、狩の様子を見守る被葬者の霊魂をひとがたに表現しようとする意図を汲み取ることができる。

Ⅲ　狩猟図を含む壁画の主題とその描出意図について

1　福島県羽山1号横穴墓の壁画主題

幾何学文である渦文を除外した場合、壁画は囲いのある狩場で4人以上が行う協同狩猟が唯一の画題となり、統一的な構成法で描かれている。獲物は赤と白で描き分けられた2頭の鹿であり、消失した中央部画像は騎馬の射手であったと推測される。赤と白の珠文が画面全体に散在している。

2　清戸迫76号横穴墓の壁画主題

主題は二つある。ひとつは中央部下段から左側に展開する構図で、狩猟場面とそれを見守る被葬者の霊魂であり、それはひとがたに描かれる。もうひとつは中央部上段から右側に展開する構図で、騎手の乗る馬を招く被葬者の霊魂をやはりひとがたに描く。二つのひとがたは服装と被り物が一致しており、同一人物であることを示している。渦文はここでは冥界を象徴しており、これと繋がることによって他界する被葬者の霊魂が愛馬を冥界に連れて行く様子を表している。

3　泉崎４号横穴墓の壁画主題

奥壁に描かれた主題は４人の勢子を伴って行う騎射の鹿狩りの場面と供物を捧げ持つ３人の女性とで構成されている。供物はその鹿の肉である。したがって、両者は別の画題ではなく、狩猟とその結果としてえられる肉の供献という一連の流れを異時同画技法によって描いた統一的な主題とみなすことができる。これと全く共通する構造が次に述べる五郎山古墳の壁画にも認められる。

なお、奥壁の壁画下方には珠文が多数描かれ、右側壁に及んでいる。また、右側壁には裸馬１頭が、左側壁には２組の馬とこれを引く馬子及び騎馬人物像が描かれており、奥壁とは別の主題となる。清戸迫76号墳例と同じく、愛馬を冥界に連れて行く様子を描いていたのかもしれない。渦文は７個が天井部に珠文や円文、２本１組の曲線文などとともに描かれ、左側壁の右端にも１個が配置されている。瑞雲が湧き星の煌く冥界が表現されていると見なされよう。

4　五郎山古墳の壁画主題

五郎山古墳の場合、先に延べた三つの横穴墓に比べて壁画の規模と図像の数が格段に大きく、全体の構成法も複雑である。狩猟はＡからＤの四つの場面によって構成されている。しかし、これは間に靫が介在しているためであって、一体的に大規模な協同狩猟が繰り広げられていると把握するべきであろう。これに付帯するいくつかの表現を読み解くことができれば、狩猟場面が描出された理由が自ずから明らかになるものと思われる。

① 狩猟表現Ｃに伴う女子像が狩を見守った後に手にしたのは獲物の肉と理解される。場面②に描かれた家は喪屋であり、この女性は喪屋の前に跪いてその肉を捧げようとしている。こうした因果関係を一つの画面に分けて描く異時同画技法は泉崎４号横穴墓と共通するものである。喪屋の前で両手を開く男性は背面像で、喪屋に向かって魂振りの呪術を行っていると見てよいであろう。このことは狩が死者への供犠のために行われたことを示している。

② 狩猟表現Ｄの騎馬には緑色に彩色した大きな四角い旗が描かれている。これは挽旗[12]であり、弔いのために行う狩であることを明示している。

③ 場面⑦と⑨に共通表現として現れる腰に左手を当て右手で手招きするような人物は一体何を表しているのか。両者が共に獲物の真上に描かれ、同心円文に向かって手招きをしていることに着目する必要があろう。同心円文は鏡や日輪・月輪を表現する場合が知られるが[13]、ここではそのいずれを候補としても狩猟との関係性を読み解くことが出来ない。同心円文は獲物の霊魂を描いたものであって、手招きは魂呼びの呪術を表現すると見て取ることができる。供犠は肉を得るだけでなく、動物霊（マナ）の獲得も目的としていたことがわかる。喪屋の中の死者に扶植する呪術が想定されよう。

④ 狩猟表現Ｄにはそうした狩猟の有様を見守る被葬者の霊魂が異形のひとがたに表現されている。狩を見守る被葬者の霊魂は清戸迫76号横穴墓にも表現されていたところである。このことは死者が自分のために供犠が行われるか否かを最大関心事としていたことを示している。

おわりに

我が国に現存する４つの狩猟場面を描いた古墳壁画を読み解くことによって、主題がモガリ儀礼における供犠であったことを推定した。中国ハニ族のモガリにおける供犠[14]と同様に、日本の古墳時代の死者にとっても、供犠は霊魂が冥界へ往生するために不可欠だったのであろう。今回は埴輪における狩猟表現との対比について触れることが出来なかったが、筆者は埴輪による狩猟表現が死者のために行われた供犠を示していることを論証し、既に論文[15,16]と口頭発表[17]を果たしている

ので、参照していただければ幸いである。

なお、小田富士雄氏は筆者の報告した瓦塚古墳における形象埴輪祭祀のあり方[18]を五郎山古墳の壁画と対比して相互に共通する内容を含むことを論破されている[19]。卓抜な研究手法であり、示唆されるところが多かった。

最後に、気にかかっているところを述べれば、それは壁画の場面設定である。珠文が星を表しているとすれば、高句麗古墳の影響を受けた可能性も考えられる。辰巳和弘氏は冥界に往生した後に、被葬者が生前と同様に王者として狩猟する姿と読み解いておられる[20]。傾聴すべき見解である。しかし、白石太一郎氏のように高句麗壁画の影響はほとんどなかったとする意見もある。五郎山古墳を除く三つの壁画が非首長墓に描かれたことから、王権儀礼を想定することは適当でなく、階層を超えた基層的な文化が背景にあったと考えてみた。

今回は、紙数が制限されている上に、準備不足で、壁画研究の先学の成果を十分に咀嚼し紹介することが叶わなかった。埴輪との関係も含めたより精細な壁画研究を今後の課題として、稿を閉じることとしたい。

最後に古墳壁画について御教示を賜った小田富士雄先生、辰巳和弘氏、桃崎祐輔氏、福島正儀氏に心から感謝申し上げる。

注

(1) 小論執筆の契機は筆者の勤務するさきたま史跡の博物館において、平成19年1月13日から3月18日の会期で開催した特別展「吉見の百穴と東国の横穴墓」に担当者のひとりとして参加し、日下八光氏の壁画模写図を熟覧する機会に恵まれたことによる。

(2) 周溝の内側にテラスを持ってから直径30mの墳丘が立ち上がっている。ここでは周溝内径を計測値とした。

(3) 黒色彩色の馬は蹄を赤で区別する通則からみても馬と見なすことが困難である。

(4) 羽方誠「壁画の調査」『国史跡五郎山古墳―保存整備に伴う発掘調査―』福岡大学考古学研究室　1998

(5) 右側の2人は高坏を捧げ持っている。

(6) 福島雅儀「福島県の装飾横穴」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集　1999

(7) 竹島国基氏は白鹿を聖獣ととらえて、被葬者がこれと巡り会った記念と解した。

(8) 日下八光氏の模写では角を描いていない、また子鹿は3才まで牡であっても角は生えない。したがって角状に見える短線の評価は微妙であり、消えかかった上部の残存部が偶然、角に見えている可能性がある。そうした場合、この図像はますます猪に近づくことになろう。

(9) A　日下八光『東国の壁画古墳』雄山閣　1998
　　B　福島正儀「福島県の装飾横穴」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集　1999

(10) 人物と馬の足もとの位置が①②よりも高い同一水平上にあることもその一理由である。

(11) 他のどの人物像よりも体軀が太く、頭髪を表現するのは五郎山古墳の男子像では異例である。

(12) 青旗が挽旗であることは万葉集に木旗・忍坂・葛城山などの枕詞となって挽歌が多く歌われていることによって知られる。万葉集巻2の第148首には「青旗の木旗の上を通うとは目には見れども直に逢はぬかも」とある。辰巳和弘氏もこのことを注20文献で述べている。辰巳氏は筆者と異なり、青旗の騎馬人物を被葬者その人と見ている。

(13) 小林行雄『装飾古墳』平凡社　1964

(14) 蘇紅「ハニ族の葬俗と日本の葬俗との比較」『東アジアの古代文化』71号　1992

(15) 若松良一「猪鹿埴輪論」『法政考古学』第30集　2003

(16) 若松良一「狩猟を表現した埴輪について」『幸魂』増田逸朗氏追討論文集　2004

(17) 若松良一「形象埴輪祭祀の構造と機能―狩猟表現埴輪を中心として―」『埴輪の構造と機能』第12回東北・関東前方後円墳研究会発表要旨資料　2007

(18) 若松良一「再生の祀りと人物埴輪―埴輪群像は殯を再現している―」『東アジアの古代文化』72号　1992ほか

(19) 小田富士雄「彩色壁画考」『国史跡五郎山古墳―保存整備に伴う発掘調査―』福岡大学考古学研究室　1998

(20) 辰巳和弘『「黄泉の国」の考古学』講談社現代新書　1996